『新古今集』春部〈落花の後〉詠の特徴
――『千載集』との比較を通して――

佐野　桃子

はじめに

本稿は、『新古今和歌集』（以下『新古今集』と略す。他の勅撰集・私撰集も同様）の歌風の特徴を、『千載集』との比較によって分析していこうとするものである。

『新古今集』の歌風の特徴については非常に多くの研究が積み上げられてきた。『千載集』との関係についても、『千載集』の色調は『新古今集』の華やかな歌風とは正反対にあること、[1]一方で『千載集』の中には新古今的色調に近い歌が見られることなどが指摘されている。[2]

『千載集』は、単に『新古今集』の一代前の勅撰集というだけではなく、『新古今集』へと続く中世和歌の始発を告げるものであると指摘する研究もあり、[3]これらの研究を踏まえると、『千載集』は『新古今集』や新古今時代の歌の生まれる基盤において、重要な位置を占めていると言えるだろう。

両集の相違点についても既に指摘はあるが、[4]具体的な表現に即して分析する余地はまだ残っていると思われる。『千載集』と比較したとき、『新古今集』にしか見られない特徴を見出せるのならば、それが『新古今集』の歌風の明らかな独自性であり、新古今時代の歌の深化の様相を明らかにする一端となるのではないだろうか。『新古今集』の歌風の特徴を検討するにあたって、『千載集』との比較を行うというのは、有効な手法であると考えられる。

そこで本稿では『新古今集』春部の桜歌を分析対象とし、『千載集』春部の桜歌と比較していくこととする。春部の桜歌に限定したのは、四季部の歌は内容が多岐に渡る他の部立よりも分析結果が明確になりやすく、また桜が春の伝統的代表的景物であるためだ。

『千載集』との比較から『新古今集』春部の桜歌の特徴を見出すことで、『新古今集』の歌風の形成の一端を明らかにしていきたい。

一　『新古今集』春部における〈落花の後〉詠

（1）『千載集』『新古今集』春部の桜歌

『新古今集』春部の桜歌の特徴を、『千載集』春部の桜歌との比較から検討していく。

春部の歌の中には単に「花」と詠まれているものもあるが、詞書や配列から桜歌だと判断できるものも対象として数えることとする。[5]

桜歌の中にも開花前、開花、落花といくつかの段階はあるが、落花の歌について論じていきたい。『千載集』では桜歌の四五・一％が落花の歌を詠んでいる。『新古今集』になるとさらに増え、桜歌の六一・九％を落花の歌が占めるようになる。『千載集』から『新古今集』にかけて、落花に向ける関心が高まっていることが推測される。

また、落花の歌の中には、桜の花びらが散っているという歌ではなく、散ってしまった後を詠むものがある。

ふるさとは花こそいとどしのばるれちりぬるのちはとふ人もなし[6]

（千載集・春歌下・花落客稀といへる心をよめる・一〇二・藤原基俊）

をしめども散りはてぬればさくら花いまは杪をながむばかりぞ

（新古今集・春歌下・題しらず・一四六・後白河院）

どちらも桜が散っている段階ではなく、その後、散った桜が姿を消してしまった頃を詠んでいる。このような詠み方の歌を、本稿では仮に〈落花の後〉詠と呼ぶことにする。

〈落花の後〉詠の歌数は『千載集』が三首のみであることに対して、『新古今集』では一二首と四倍になっている。落花の歌の数に占める割合で見ても、『千載集』九・四％から『新古今集』二三・一％と大幅に増加していることが分かる。『新古今集』では『千載集』より落花の歌が増加し、〈落花の後〉詠もまた増えているのだ。『千載集』と比較したときの『新古今集』春部の桜歌の特徴の一つであると言えよう。

（2）『千載集』の〈落花の後〉詠

両集の〈落花の後〉詠の比較を通して、『新古今集』春部の桜歌の特徴を検討していきたい。〈落花の後〉詠を全て示してみよう。

『千載集』

あかなくにちりぬる花のおもかげや風にしられぬさくらなるらん

（春歌下・〈花の歌とてよめる〉・九六・覚盛）

ふるさとは花こそいとどしのばるれちりぬるのちはとふ人もなし

（同・花落客稀といへる心をよめる・一〇二・藤原基俊）

花はみなよものあらしにさそはれてひとりや春のけふはゆくら

ん　（同・三月尽日、皇太后宮大夫俊成のもとによみて
つかはしける・一三一・静賢）

『新古今集』

花ちれば問ふ人まれになりはててていとひし風のおとのみぞする
（春歌下・花落客稀といふ事を・一二五・藤原範兼）

さくら花ゆめかうつつか白雲のたえてつねなき峰の春風
（同・五十首歌たてまつりし時・一三九・藤原家隆）

ちる花のわすれがたみの嶺の雲そをだにのこせ春の山かぜ
（同・千五百番歌合に・一四四・藤原良平）

花さそふ名残を雲にふきとめてしばしはにほへ春の山風
（同・落花といふ事を・一四五・藤原雅経）

をしめども散りはてぬればさくら花いまは杪をながむばかりぞ
（同・題しらず・一四六・後白河院）

芳野山花の古郷あとたえてむなしきえだに春風ぞふく
（同・残春のこころを・一四七・藤原良経）

故郷の花のさかりはすぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな
（同・題しらず・一四八・源経信）

花はちりその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる
（同・百首歌中に・一四九・式子内親王）

おもひたつとりはふるすもたのむらんなれぬる花の跡の夕暮
（同・千五百番歌合に・一五四・寂蓮）

ちりにけりあはれうらみのたれなれば花のあととふはるの山かぜ
（同・同・一五五・同）

春ふかく尋ねいるさの山のはにほの見し雲の色ぞ残れる
（同・同・一五六・藤原公経）

はつせ山うつろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる
（同・百首歌たてまつりし時・一五七・藤原良経）

『新古今集』においては、範兼（一二五）・後白河院（一四六）・経信（一四八）以外は当代歌人であることが注目される。

先行する勅撰集『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』の春部の桜歌には〈落花の後〉詠は見られない。『千載集』にわずかに見え、『新古今集』で急増することは前項で述べた。新古今時代の歌風が反映された詠み方なのではないかと推測されるのである。

また、『千載集』の〈落花の後〉詠は数が少ないだけではなく、『新古今集』のそれとは詠み方が異なることも分かる。具体的に用例を分析していきたい。

まず『千載集』の〈落花の後〉詠だが、

ふるさとは花こそいとどしのばるれちりぬるのちはとふ人もなし
（千載集・一〇二）

花はみなよものあらしにさそはれてひとりや春のけふはゆくらん
（同・一三二）

『千載集』一〇二は桜が咲いていた頃は訪れる人もあったが、散ってしまった今となっては訪れる人はないという〈落花の後〉を詠む。一三一は桜は嵐に散り消えてしまい、続いて春も終わろうとしているという〈落花の後〉を詠む。単に時間が推移したことを意味する〈落花の後〉だ。『新古今集』の〈落花の後〉詠の一部にも同様の詠み方は確認される。

花ちれば問ふ人まれになりはててていとひし風のおとのみぞする
（新古今集・一二五）

をしめども散りはてぬればさくら花いまは杪をながむばかりぞ
（同・一四六）

おもひたつとりはふるすもたのむらんなれぬる花の跡の夕暮
（同・一五四）

ちりにけりあはれうらみのたれなれば花のあととふはるの山かぜ
（同・一五五）

『新古今集』一二五は『千載集』一〇二と同じ「花落客稀」の題で、桜が散りきったために訪れる人も稀になったという〈落花の後〉を詠む。一四六は桜が散り果ててしまったことを詠み、咲いていた姿ももはやない「杪（こずゑ）」を眺めている、という〈落花の後〉だ。一五四は、

花はねに鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき
（千載集・春歌下・百首歌めしける時、くれの春のこころを よませたまひける・一二二一・崇徳院）

を参考にしていると考えられ[7]、慣れ親しんだ桜が散り、根に帰ってしまった後の夕暮れを詠む。一五五は、桜を散らせた恨みが誰にあるというので、散らせた当の風自身が花の後を訪れるのか、と詠む。

これらの歌は『千載集』の〈落花の後〉詠同様、時が過ぎ桜が散り果ててしまい何も残っていないこと、そして訪れる人も稀になったことや春が終わることを詠んでいる。

『千載集』〈落花の後〉詠と、『新古今集』〈落花の後〉詠の一部は、時間の推移を表現するだけの〈落花の後〉であることが確認できた。

（3）『新古今集』の〈落花の後〉詠

一方、『新古今集』の〈落花の後〉詠には、単に春の時間が推移しただけではなく、消失した桜の景を面影として、現在見ている景の背後に漂わせる詠み方が確認できる。

芳野山花の古郷あとたえてむなしきえだに春風ぞふく
（新古今集・一四七）

故郷の花のさかりはすぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな
（同・一四八）

花はちりその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる
（同・一四九）

一四七の「むなしきえだ」は諸注[8]が指摘する通り、漢語「空枝」を和らげたものだ。「空枝」を使った詩句には『白氏文集』（巻十九・

一二七二・「惜小園花」）がある。第一・二句のみ引用する。[9]

曉來紅蕚凋零盡　曉來　紅蕚凋零し盡き、
但見空枝四五株　但だ見る　空枝四五株。

「夜が明けてみると、紅い花びらがすっかりしぼみ落ちてしまい、ただ枝ばかりの四、五株の木が目に入るだけだ」と通釈され、「空枝」は「花のない枝」と解される。一四七の「むなしきえだ」も同様に「花のない枝」を意味する。つまり、かつて桜が咲いていたことを前提として、何もなくなってしまった「むなしきえだ」の景と、かつてそこに咲いていた桜の景が重ねられていると考えられる。

前項にあげた一四六とは散り果ててしまった梢を詠むという点で共通する。一四七は「むなしきえだ」によって、桜が咲いていたことを前提として、喪失と漂う面影とを表現している。しかし一四六は単に「杪」とあるだけで、そこに面影を見てはいない。ただし桜を惜しむ気持ちで「杪」を見ていることは確かだ。一四六は桜を幻視する一四七に繋がる詠み方だと考えられる。

一四八は「おもかげさらぬ」という言葉で、かつて見た桜の名残が空に消えないことを表現している。現在は何もないはずの空に桜を幻視していると言えるだろう。

この第四句は経信の家集の伝本により「おもがはりせぬ」という異文が知られている[10]ので、その問題に触れておきたい。「おもがはりせぬ」の場合は、花の盛りが過ぎてもまだ空の様子は変わらず春らしいままであることを表現する。「おもかげさらぬ」の場合は、花の盛りが過ぎてもその面影を忘れることができないことを表現する。『経信集』における本来の歌題が「未忘春意」である[11]ことを踏まえ、題意に適うのは「おもかげさらぬ」だと考えたい。

いずれにしても、一四八が「おもがはりせぬ」ではなく「おもかげさらぬ」という本文で採られ、落花の後の喪失感を詠んでいる一四七、一四九の間に配されていることを重視したい。

一四九の第二句「その色となく」は「美しい色に惹かれるというわけでもなく」と解釈され[12]、また、初句「花はちり」や前歌一四八との繋がりを考慮すると、かつて空に見た桜は消えてしまったということを背景に置き、何もない空を眺めてかつての景を幻視していると解釈できる。

桜の「おもかげ」という言葉は、前項にあげた『千載集』九六にも使われていた。『千載集』九六の「花のおもかげ」は、「風にしられぬ」という表現から心の中で桜を思っているものだと理解でき、幻視しているわけではない。先述した『新古今集』一四八などの、桜の面影を現在の景に重ねる詠み方とは異なる点に注意したい。

『新古今集』〈落花の後〉詠には、消失した桜の景を面影として現在見ている景と重ねる詠み方があることを確認した。この詠み方は『千載集』には見られなかったものだ。

（4）『新古今集』〈落花の後〉詠の雲を桜に見立てる詠み方

また、『新古今集』の〈落花の後〉詠には、現在の景にかつて見た桜の景を重ねる歌の一つの型として、雲を桜に見立てる詠み方がある。

さくら花ゆめかうつつか白雲のたえてつねなき峰の春風
（新古今集・一三九）

ちる花のわすれがたみの嶺の雲そをだにのこせ春の山かぜ
（同・一四四）

花さそふ名残を雲にふきとめてしばしはにほへ春の山風
（同・一四五）

春ふかく尋ねいるさの山のはにほの見し雲の色ぞ残れる
（同・一五六）

はつせ山うつろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる
（同・一五七）

桜が散ってしまった後、かつて桜と見紛った雲だけが残っていて、そこに桜の面影を幻視しているという詠み方だ。一三九についてはさらに時間が推移し、桜と思って見た雲までもが消えてしまったことを詠んでいるが[13]、雲に桜を幻視している点は他の用例と同じだ。

この雲を桜に見立てる詠み方は『千載集』にはない。先行する勅撰集にも見られない。勅撰集の中では『新古今集』に初めて見える見立て表現だ。先行する勅撰集にはなかったこの表現が、『新古今集』では右にあげた五首も見られることは、『新古今集』の特徴の一つとして数えられるだろう。雲を桜に見立てる歌については第二節で詳しく検討したい。

『千載集』と『新古今集』の〈落花の後〉詠には以上の相違点が指摘でき、ここに『新古今集』の歌風の特徴の一端を見出せるのではないかと考える。

（5）〈消失した桜の景〉詠

『新古今集』春部の桜歌に見られる、散ってしまった桜の面影を現在の景に重ねる詠み方については、谷知子氏の論[14]が参考になると考えられる。谷氏の論は、二つの異なる季節を二重写しにするイメージの重層法について論じたものだ。例えば『六百番歌合』の冬部「枯野」題の歌、

夢かさは野べの千くさのおもかげはほのぼのまねくすすきばかりや
（十七番左・藤原定家）

など「失われた秋のイメージを揺曳した枯野の景」の歌をあげ、「強い喪失感が一首全体に漂っている」こと、消え去った秋の風景のイメージが「面影として一首の中に残り、消失後の冬の景の背後に潜む」ことを指摘し、〈「消失」を詠んだ冬歌〉と名付けている。そして消失した世界・風景を「無の空間の中に面影として残すという手法」の歌を生んだ「新古今歌人の意識、志向を探ることに意味があり、新古今歌風の一端を明らかにすることができるのではないだろうか」と述べている。

谷氏は季節の推移を主眼として〈「消失」を詠んだ歌〉を検討している。しかしここまで述べてきた『新古今集』の〈落花の後〉詠を見ると、春という一つの同じ季節の中でも、落花の前後の景について同様に、景を二重写しにする詠み方が指摘できるのではないかと思われるのである。以降、落花の前後の景を二重写しにしている歌を、谷氏の論から言葉を借りて〈消失した桜の景〉詠と呼びたい。

では〈消失した桜の景〉詠という『新古今集』の特徴的表現の淵源はどこにあるのだろうか。

二　雲を桜に見立てた〈消失した桜の景〉詠

（1）建久期前の雲を桜に見立てた歌

〈消失した桜の景〉詠の淵源を探るにあたって、まずは『新古今集』の〈消失した桜の景〉詠に見られたような、雲を桜に見立てる詠み方について検討していく。

そのためには『新古今集』の歌風が萌し始める時期の歌に注目するべきだろう。『千載集』には〈消失した桜の景〉詠は見られなかったことから、『千載集』の成立から『新古今集』の成立までの期間に、〈消失した桜の景〉詠が『新古今集』に入集するに至る、何らかの要因があると推測されるためだ。

先行研究によって建久期に『新古今集』の歌風の萌芽が見えることは明らかになっている。[15] そこで、良経家歌壇を中心とした建久期の和歌と、良経家歌壇を吸収した後鳥羽院歌壇において『新古今集』成立前に詠まれた和歌に目を向け、雲を桜に見立てた用例について検討していくことが必要だと思われる。建久期より前、建久期、『新古今集』成立までの後鳥羽院歌壇の三つの期間に分け、それぞれの詠み方を分析していきたい。

まずは建久期に至る前の私撰集・私家集・歌合・定数歌を対象として、「花／桜」と「雲」を詠み込む歌を分析した。

桜を雲に見立てる歌であれば、

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲
（古今集・春歌上・歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる・五九・〈紀貫之〉）

など、既に『古今集』に見える。

一方逆の見立て、雲を桜に見立てるものは、平安末期まで見られない。比較的早い例としては、

おもかげに花のすがたを先だててていくへこえきぬ嶺の白雲
（長秋詠藻・崇徳院近衛殿に御幸ありし日、遠尋山花といふ心をよませたまひし時よめる・二〇七／続詞花集・春下・五〇・藤原俊成）

よしの山くもをはかりにたづねいりてこころにかけし花をみるかな
（山家集・春・花の歌あまたよみけるに・六二）

があげられる。俊成の歌は桜の面影を想起させるものとしての雲を

詠んでおり、通常の見立てとは異なるが、見立てに近い発想の詠み方であるため、ここであげた。この歌は詞書により康治二年（一一四三）の詠であることが確認できる。[16] 西行の歌は詠歌事情は判明しないものの、『山家集』の原型が成立したとされる仁安二年（一一六七）頃[17]には詠まれていたものと考えられる。

しかしこれらの歌は、桜が咲く前に山を尋ね、そこで見た雲に桜の面影を感じている内容だ。『新古今集』の歌に見られた、落花の後にかつて桜と見紛った雲のみが残り、そこに桜を幻視するといった詠み方ではない。

西行には他にも雲を桜に見立てた歌がある。

吉野山さくらにまがふしら雲のちりなんのちははれずもあらなん　（山家集・春・〈落花の歌あまたよみけるに〉・一三二）

よしの山人に心をつげがほにはなよりさきにかかるしら雲　（同・同・花歌十五首よみけるに・一四三）

空わたる雲なりけりなよしの山はなもてわたる風とみたれば　（同・雑・〈題しらず〉・九八七）

雲もかかれはなとをはるはみてすぎんいづれの山もあだにおもはで　（同・同・同・九八九）

雲かかるやまみばわれもおもひいでに花ゆゑなれしむつび忘れず　（同・同・同・九九〇）

一四三は六二や俊成歌と同様、桜が咲く前の雲に桜を想起する。九八七は空を流れる雲に風に舞う桜を見る。九八九は山にかかる雲を桜と見よう、という内容。この三首は〈落花の後〉詠ではない。

一三二は桜が散ってしまった後は雲を桜と見るから晴れないでほしいという内容で、まだ散ってはいないものの、発想は〈落花の後〉詠と共通する。九九〇は雲のかかる山に桜の頃を思い出すという内容の〈消失した桜の景〉詠だ。

私撰集では『月詣集』に雲を桜に見立てた歌が目立つ。

けふも又花まつほどのなぐさめにながめ暮しつみねのしら雲　（月詣集・二月・〈閑中待花といふことをよめる〉・九〇・藤原実定）

いつとなきよしのの山のしら雲も花まつ春ぞめにはかかれる　（同・同・〈対山待花といふことをよめる〉・九三・兼俊）

さき初むる花かとみればさもあらでいく度きえぬ峰の白雲　（同・同・同・九四・聖印）

花かとてたづねにたれば白雲のたつたの山のこずゑなりけり　（同・同・尋山花といふことをよめる・九六・惟宗広言）

はなみにといそぐ山ぢにいとどしく心さわがす峰のしら雲　（同・同・教長卿歌合に、尋山花といふことをよめる・九九・顕昭）

桜花ちりなん後のすがたをばかはりてみせよ峰のしら雲　（同・同・〈重保が賀茂歌合に、花を〉・一三二・藤原実房／別雷社歌合・花・二番左・六三）

よし野山峰にたなびく白雲ははるをかぎらぬさくらなりけり

（同・雑上・題しらず・七〇六・藤原顕家）

まがふとていとひし雲はよしの山花散りてこそかたみなりけれ

（同・同・題しらず・七一四・経円）

九〇、九三、九四、九六は、桜が咲く前や桜を見る前の期待感から、雲を桜と見てしまうことを詠んでいる。〈落花の後〉詠よりも桜が咲く前の歌の方が多く採られている。

しかし、一三二、七〇六、七一四は〈消失した桜の景〉詠の発想で詠まれている。一三二は桜が散ってしまった後は代わりに雲が桜の姿を見せてほしい、という内容。桜が姿を消した後、雲にその姿を幻視するという詠み方に繋がる点がある。

七〇六は雲を春以外にも見られる桜とする。

七一四は、桜の咲いていた頃は見紛うので邪魔に思っていた雲が、散ってしまった後では桜を思い出す縁となるのだ、という気付きを詠む。〈消失した桜の景〉詠に繋がる詠み方だ。

ただし、七〇六、七一四は雲が桜に見えることが主題であること、そして雑部に採られていることから、桜を惜しむ気持ちは強くないと言えるだろう。

私家集においては、源行宗、覚性法親王、藤原清輔、源頼政、源有房、源師光、惟宗広言、平親宗、登蓮、守覚法親王らの歌に、雲を桜に見立てる例を見出せた。ここでは〈落花の後〉詠のみあげてみる。

花は皆ちりぬと思ふかなしきに我がなぐさめに嶺の白雲

（頼政集・落花、按察公通十首の内・九四）

山ざくらなぬかといふにちりはててなごりとどむるみねの白雲

（親宗集・春部・賀茂歌合に、花の心を・一四／別雷社歌合・花・十六番右・九二）

さくらばなちりなんのちのおもかげにあさゐるくものたたむとすらん

（登蓮集・桜・二）

『頼政集』九四は桜が散った悲しさを雲を見て慰める。『親宗集』一四は『月詣集』一三二同様、『別雷社歌合』において「花」の題で詠まれたもの。峰の雲だけが桜の名残を留めていると詠む。『登蓮集』二は雲は桜の面影として立つのだろうかと詠む。この三首は『新古今集』に見えた〈消失した桜の景〉詠に通じるものがある。

ここまで、建久期に至る前の期間における、雲を桜に見立てた歌を分析してきた。この見立ては俊成・西行の頃まで見出すことができず、比較的早い例としては、桜が咲く前の雲に桜の面影を感じているものがあった。また、〈落花の後〉詠の例も見出せた。その中には〈消失した桜の景〉詠に繋がる発想の詠み方として、まだ桜は咲いているが散ってしまった後のことを気にかけ、雲を桜の代わりにしようとする歌があった。そして桜が散ってしまった後、雲を桜の代わりとして眺めるという〈消失した桜の景〉詠に繋がる歌も、わずかながら見出せた。

ではこれらの詠み方は以後どのように詠まれ、『新古今集』に見られる〈消失した桜の景〉詠へと続いていくのだろうか。

（2）建久期における雲を桜に見立てた歌

続いて建久期の私家集・歌合・定数歌を対象として、「花／桜」と「雲」を詠み込む歌を分析した。

建久期以降の雲を桜に見立てる歌の内〈落花の後〉詠でないものには、

待ちえても猶しら雲と見ゆるかな花にさきだつ心ならひは
（正治後度百首・春・花・八〇九・宮内卿）

面かげの花を山路のしるべにて跡なき峰の雲を分けきぬ
（仙洞句題五十首・山路尋花・一〇・俊成卿女）

さきやらぬ峰の梢の雲の上によそ目は花の盛なりけり
（同・山花未遍・一五・慈円）

などがある。桜が咲く前の期待感から雲に桜を感じるという、俊成や西行の歌に見えた詠み方をもとに、宮内卿は桜が咲いた後もどうせ雲だろうと見なしてしまうと詠み、俊成卿女は前掲の『長秋詠藻』二〇七の影響がうかがえる歌を詠み、慈円は咲く前の峰の雲もよそ目に見れば桜の盛りに見えると詠む。

建久期の雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠の用例としては、

あかでちる花よりのちのしら雲は花よりも猶うれしかりけり
（拾玉集・一日百首・花・九一〇）

心あてにながめしやまのさくら花うつろふままにのこるしらくも
（秋篠月清集・西洞隠士百首・春廿首・六一五）

散りぬれど花は雲にもなぐさみきたぐひもみえずくるる春かな
（御室五十首・春十二首・一二・守覚法親王）

よしさらばさても心をなぐさめよ花ちる嶺にのこる白雲
（同・同・四一〇・藤原隆信）

があげられる。

『拾玉集』九一〇は、満足できない内に桜が散ってしまった後には、桜の代わりとして見ることのできる雲が、桜よりも一層嬉しいものだと詠む。

『秋篠月清集』六一五は、そこかと推測して眺めた山の桜は、桜が散った後に残った雲だった、と詠む。

『御室五十首』一二は、桜が消えた後も雲を見れば慰められると詠む。ただし、桜が消えるのは雲があるからまだいいけれど、春は代わりになるものがなく暮れてしまう、という惜春を詠んだものであり、桜を惜しむ歌とは異なる点がある。

同四一〇は、桜が散った後の嶺に残る雲に向けて、心を慰めてくれと呼びかける内容だ。

建久期の雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠としてあげた四首は、桜が姿を消した後には雲が代わりとなる、という発想が共通している。『新古今集』の〈消失した桜の景〉詠に見られる、雲に桜の幻影を重ねる意図や桜の喪失感は希薄だった。

『新古今集』入集の雲を桜に見立てた〈消失した桜の景〉詠と同質の例を建久期に見出すことはできなかった。しかし建久期の用例

からは、平安末期に見えた雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠が一過性の発想ではなく、建久期に至っても詠まれ、〈落花の後〉詠の型として定着しつつある様子がうかがえた。

（3）後鳥羽院歌壇における雲を桜に見立てた歌

続いて良経家歌壇を吸収した後鳥羽院歌壇に目を向け、『新古今集』成立前の雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠の用例を検討する。

まずは『新古今集』〈落花の後〉詠に見られた、雲を桜に見立てた歌五首全てが、この期間に詠まれていることを指摘したい。

はつ瀬山うつろふ花に春くれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる
（正治初度百首・春・四二一・藤原良経／新古今集・一五七）

花さそふ名残を雲にふきとめてしばしはにほへはるの山かぜ
（仙洞十人歌合・落花・十四番右・二八・藤原雅経／新古今集・一四五）

桜花夢かうつつかしら雲のたえてつねなきみねの春風
（老若五十首歌合・春・三十九番左・七七・藤原家隆／新古今集・一三九）

はるふかくたづねいるさのやまのはにほの見し雲の色ぞのこれる（千五百番歌合・春四・二百三十番左・四五九・藤原公経／新古今集・一五六）

ちる花のわすれがたみのみねのくもそをだにのこせはるのやまかぜ
（同・同・二百六十八番左・五三四・藤原良平／新古今集・一四四）

いずれも後鳥羽院主催の和歌行事で詠まれた歌である。『新古今集』〈落花の後〉詠に見られた雲を桜に見立てる詠み方と、後鳥羽院歌壇において詠まれた和歌の、強い結び付きが確認される。

ではこれらの『新古今集』入集歌が詠まれたのと同じ時期には、どのような〈落花の後〉詠が確認できるだろうか。

山ざくら散りなん後のおも影をかはらず見せよ嶺のしら雲
（正治初度百首・春・一二一九・藤原隆信）

春もくれぬ花の名残とながむれば軒端につづく峰のしら雲
（通親亭影供歌合・山家暮春・六番右・一一二一・藤原忠良）

よし野やま雲にうつろふはなのいろをみどりの空にはるかぜぞふく
（千五百番歌合・春三・百九十六番左・三九一・女房〈後鳥羽院〉）

まがふとていとひしみねのしら雲はちりてぞ花のかたみなりける
（同・春四・二百三十番右・四六〇・源通光）

よしのやまたづねし花はちりはててあとなき雲のあとを見るかな
（同・同・二百三十三番右・四六六・丹後）

さらに又なほおもかげにさくらばなやよひの雲のくれがたのそら
（同・同・二百六十五番右・五二九・藤原家隆）

花になれしなごりを雲にながむればやよひのくれのはるさめのそら
（同・同・二百八十五番右・五六九・藤原忠良）

いまはよも花もあらしの夏やまにあを葉まじりのみねの白雲

（同・夏一・三百七番右・六一三・藤原家隆）

『正治初度百首』一二一九の隆信歌は、本節（1）にあげた『月詣集』一三二の実房歌の焼き直しのような歌で、非常に似通った語句で構成されている。相違点としては、初句の「桜花」「山ざくら」の他、第三・四句は、実房歌に「すがたをばかはりてみせよ」とあったところを、隆信歌は「おも影をかはらず見せよ」とする。この二句もよく似ているが、〈消失した桜の景〉詠として見たとき、表現の深化を認めることができるのではないか。

実房歌は、桜と同じ形状を桜の代わりに雲が見せよ、と詠む。違う存在ではあるが見た目に共通点があるため代替になれるだろうという、見立ての機能に寄りかかった詠み方だ。一方隆信歌では、桜の幻影を変わらず見せよと詠むのである。雲は桜の幻影を想起させるものとして詠まれている。雲を桜の代わりにしようとした実房歌に対して、隆信歌は雲と同時に消失した桜の幻影を見ようとし、二重写しに詠み込んでいると言える。『新古今集』〈消失した桜の景〉詠と同じ詠み方である。

『通親亭影供歌合』一一二、『千五百番歌合』四六〇、四六六、五二九、五六九も同様に、雲を見ながら〈消失した桜の景〉の幻影を見る。その二つの景の重なり合う情景が構成されている。

同三九一は、桜は散って雲が桜と同じ形を見せてくれる、その雲の浮かぶ「みどりの空」に（かつて桜を散らせた）春風が吹く、と詠む。雲によって呼び起こされた〈消失した桜の景〉を、雲のある空に重ねている。

同六一三は夏題の歌だが、これも〈消失した桜の景〉詠なので例にあげた。夏となった今では万が一にも桜はあるまい、しかし山に雲がかかっているのを見ると、青葉交じりの遅桜のように見える、という内容。〈消失した桜の景〉を幻視し雲に重ねている詠み方だ。

『新古今集』成立前の後鳥羽院歌壇における、雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠を見てきた。掲げた用例を分析すると、『新古今集』に入集する〈消失した桜の景〉詠と同質の〈消失した桜の景〉詠を見出せることが分かった。

（4）雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠と〈消失した桜の景〉詠

ここまで雲を桜に見立てた歌について検討してきた。以下に明らかになったことをまとめる。

『新古今集』に見られた雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠には、眼前から消失した桜の面影を雲に幻視するという特徴があった。この特徴の淵源を探るため雲を桜に見立てる歌を分析した。

まず、桜を雲に見立てる歌は『古今集』など早くから見られることに対して、雲を桜に見立てる歌は平安末期になるまで見出せなかった。比較的早い例は、桜が咲く前の期待感から雲に桜を感じるという詠み方をしていた。これは『新古今集』〈消失した桜の景〉

詠の、喪失感により雲に桜の面影を幻視する詠み方とは異なっていた。

それより少し遅れて、『新古今集』〈消失した桜の景〉詠に繋がる、雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠が確認できた。それらは桜の代わりとして雲を見るという詠み方で、雲に〈消失した桜の景〉を幻視する詠み方ではなく、『新古今集』に見られた特徴とは異なっていた。『千載集』成立前には雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠は既に詠まれていたのだが、『千載集』には採られていないことに注意したい。

建久期においては、平安末期同様、桜の代わりとして雲を見るという歌が詠まれていた。〈落花の後〉詠において雲を桜に見立てる詠み方の定着している様子がうかがえた。

後鳥羽院歌壇になると、雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠の中に、雲を見ながら〈消失した桜の景〉を幻視し二つの景を重ねて眺める、という例が見えるようになる。『新古今集』入集の雲を桜に見立てた〈消失した桜の景〉詠は、全て後鳥羽院歌壇において詠まれた歌だった。入集歌以外にも同質の〈消失した桜の景〉詠を見出せた。

平安末期から詠まれ始めた雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠は、『千載集』には採られなかったものの、建久期にも詠み継がれ、後鳥羽院歌壇において喪失感から雲に桜を幻視する詠み方へと深化していった。桜を惜しむ詠み方の新たな典型の形成されていることが明らかになったのではないだろうか。

三　見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠

（1）建久期前の見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠

見立てを使う場合の〈消失した桜の景〉詠について検討したが、では見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠はいつ頃から詠まれているのだろうか。

まずは建久期に至る前の用例を検討する。先行する勅撰集、四季部を有する私撰集として『後葉集』『続詞花集』『今撰集』『月詣集』、それから、平安時代の「花／桜」と「散」、「花／桜」と「面影」、「花／桜」と「あと／のち」、「花／桜」と「むなし」を詠み込んだ歌を対象とした。

稿者の調査の範囲では、前節で扱った、

ふるさとのはなのさかりはすぎぬれどおもがはりせぬはるのそらかな　（経信集・未忘春意・四六／新古今集・一四八）

を見出すことができた。前節で述べた通り第四句の本来の形は「おもかげさらぬ」だと考えると、この歌が建久期に至る前の見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠にあたる。

『新古今集』の〈消失した桜の景〉詠を分析する視点においては、経信歌も同質の歌として解釈されるが、当該歌は必ずしも〈消失した桜の景〉詠として解されてきたわけではないようだ。

経信歌は藤原清輔の『和歌一字抄』において、第四句を「おもかげさらぬ」として「不忘未忘」項に採られ、詞書も「未忘昔意」と書かれる。この場合、消えない面影は散り消えた桜ではなく、栄えていた頃の故郷のものと解されるだろう。

しかしながら『新古今集』では、「むなしきえだ」を詠む一四七と「むなしき空」を詠む一四九の、桜の消失を詠む二首に挟まれて配置されている。『新古今集』は経信歌を〈消失した桜の景〉詠として見出し評価しているのではないか。あるいは経信歌は〈消失した桜の景〉詠として新古今時代に再発見されたのかもしれない。

管見の範囲では、建久期に至る前の〈消失した桜の景〉詠は、経信歌以外の例を見出すことができていない。

この経信という歌人は、定家の『近代秀歌』で、近代の和歌の衰退が指摘された後、

然れども、大納言経信卿・俊頼朝臣・左京大夫顕輔卿・清輔朝臣、近くは亡父卿、即ちこの道を習ひ侍りける基俊と申しける人、このともがら、末の世の賤しき姿を離れて、つねに古き歌をこひねがへり。この人々の思ひ入れて秀れたる歌は高き世にも及びてや侍らむ。[18]

と名をあげられている。近代の衰退している和歌に対して、経信をはじめとする六人の歌人たちの歌は、古き理想の時代の歌にも及ぶのではないか、と言うのである。

また、『新古今集』などの中世和歌に見られる風景表現を新たに開発した歌人であるとも指摘されている。[19]

つまり経信は、『新古今集』の歌風へと繋がる歌を詠み、また定家ら新風の歌人に注目された歌人なのだ。[20] その経信の歌が、〈消失した桜の景〉詠として『新古今集』に入集しているという点に、ここで注目しておきたい。

経信歌は、春を忘れることができないという意を表現する中であらわれた。春を代表する景物である桜の消失を詠み、その面影を引きずることで、忘れ難い春を惜しむ心を表現したのである。そして後に、〈消失した桜の景〉詠として『新古今集』に入集することとなる。

（2）建久期における〈消失した桜の景〉詠

続いて良経家歌壇を中心とした建久期の和歌を検討していく。鎌倉時代の私撰集、私家集、定数歌、歌合の内、「花／桜」と「散」、「花／桜」と「面影」、「花／桜」と「あと／のち」、「花／桜」と「むなし」を詠み込んだ歌を対象とした。

『新古今集』の見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠は三首あったが、一首は前掲の経信歌であり、一首は建久期に詠まれたものだ。

よしのやま花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風ぞ吹く

（六百番歌合・春・残春・三十番左・一七九・女房〈藤原良経〉／新古今集・一四七）

良経歌はかつて桜があった「むなしき枝」に桜を幻視するが、同時に春風の吹く「むなしき枝」のむなしさが浮き上がる。経信歌の幻視の場合は、春を思い出す縁となり、「はなのさかり」の時期と消失した現在とを繋ぐような働きをしていた。良経歌においてはかえって喪失感を強調する機能を持っているという点に違いがある。

この良経主催の『六百番歌合』では他にも〈消失した桜の景〉詠を見出すことができる。

このもとは日数ばかりをにほひにて花ものこらぬ春のふるさと

（同・同・同・廿八番左・一七五・藤原定家）

「暮春の旧里では、春の終りまで、僅かの日数を残すばかり、それがいわば春の形見の匂いで、木の下には花も残っていない」[21]と解されるように、「にほひ」には春の名残としての形見、かつてそこにあった花の美しさを重ねているものと考えられる。散ってしまった桜の景の面影を幻視して捉え、春の終わろうとする「ふるさと」の景に重ねている。

「残春」は『六百番歌合』で初めて出題された題だが、同題で詠まれた十二首の内、前掲二首の〈消失した桜の景〉詠を見出せることが注目される。春や桜を惜しむ詠み方の一つになっている様子がうかがえるのである。

建久期の定家の歌には他にも例が見える。

梢よりほかなる花の面影にありしつらさのにたる風かな

（拾遺愚草・花月百首・花五十首・六三八）

『拾遺愚草』六三八は「梢よりほか」に桜を幻視している。そこに吹きつける風に桜を散らせたそれと同じつらさを感じている。

ここまで建久期における見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠を分析してきた。まず『新古今集』入集歌のあることが注目された。これは『六百番歌合』「残春」題にて詠まれたもので、同題の定家の歌にも〈消失した桜の景〉詠を確認できた。

また、定家の『拾遺愚草』の例を合わせると、春や桜を惜しむ詠み方の一つとしてあらわれたのが〈消失した桜の景〉詠ではないかと推測される。

（3）後鳥羽院歌壇における〈消失した桜の景〉詠

続いて『新古今集』成立前の後鳥羽院歌壇において詠まれた歌を検討したい。

『新古今集』の見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠三首の内、最後の一首はこの期間に詠まれたものだ。

花はちりてその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる

（正治初度百首・春・二二一・式子内親王／新古今集・一四九）

これは後鳥羽院の下命により詠まれた歌だ。『新古今集』入集の見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠は、一首は建久期より前、一首は建久期、一首は後鳥羽院歌壇において詠まれたということになる。

後鳥羽院歌壇においては他にも、

花の色はやよひの空にうつろひて月ぞつれなき有明の山

（老若五十首歌合・春・四十八番右・九六・藤原良経）

という例を確認できる。

良経歌は式子内親王歌と同様に、散り果てた桜の色を空に見出している。しかし実際に空に残るのは月だけだ。「花の色」を幻視し、実際には有明の月だけがある空に重ねていると言えよう。

後鳥羽院歌壇における〈消失した桜の景〉詠には『新古今集』入集歌があり、その他にも喪失感の強く感じられる例を見出せた。

建久期の例と異なるのは、木の周辺ではなく空に桜の面影を幻視している点だ。枝や木の下など、桜の姿があって当然の場所に幻視しているのが建久期の例だった。後鳥羽院歌壇では、そのような場所から一歩離れ、空に幻視するという詠み方が見られるようになっている。これは、

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける

（古今集・春歌下・亭子院歌合歌・八九・紀貫之）

のような、空に散っていく桜を詠んだ歌の発想に基づく詠み方なのかもしれない。あるいは、雲を桜に見立てる詠み方を承けて、空に注目するようになった詠み方であると考えることもできよう。

この流れの中で経信歌も見出され『新古今集』に入集した可能性が考えられる。

（4）〈消失した桜の景〉詠と『新古今集』

ここまで見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠について検討してきた。建久期に至る前には、春を忘れることができないという意で桜の消失と幻視を詠んだ経信歌があった。建久期には春や桜を惜しむ詠み方の一つとして詠まれ、後鳥羽院歌壇においてはそれらを継承しつつも空に幻視する詠み方が見られるようになった。

ここで雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠の分析と絡め、〈消失した桜の景〉詠全体を眺めたい。これまで分析して明らかになった傾向を時系列順に並べると次のようになる。

平安中期頃　見立てを使わずに〈消失した桜の景〉を詠み、春や桜を惜しむ経信歌

平安末期　雲を桜に見立て、咲く前の期待感を詠む詠み方

雲を桜に見立て、落花後の代わりとする詠み方

雲を桜に見立て、落花後の代わりとする詠み方

建久期　見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠による、春や桜を惜しむ詠み方

後鳥羽院歌壇　雲を桜に見立てた〈消失した桜の景〉詠

見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠による、春や桜を惜しむ詠み方

空に桜を幻視する詠み方

本稿で見出した、〈消失した桜の景〉詠とそれに繋がる歌の例の内、最も古いものは経信歌だったが、これが必ずしも〈消失した桜の景〉詠として解されていたわけではないこと、新古今時代に〈消失した桜の景〉詠として再発見された可能性があることは、本節（1）で触れた。管見の限りでは、経信の後にはしばらく例を見出すことができず、俊成・西行の頃から〈消失した桜の景〉詠に繋がる詠み方が見え始める。そして建久期に〈消失した桜の景〉詠が萌芽すること、後鳥羽院歌壇において〈消失した桜の景〉詠が深化していくことが分かった。

こうした流れの中で『新古今集』春部には八首もの〈消失した桜の景〉詠が採られたのである。

改めて『新古今集』春部の〈消失した桜の景〉詠を示し、『新古今集』においてどのように扱われているのか確認してみよう。

さくら花ゆめかうつつか白雲のたえてつねなき峰の春風
（春歌下・五十首歌たてまつりし時・一三九・藤原家隆）

ちる花のわすれがたみの嶺の雲そをだにのこせ春の山かぜ
（同・千五百番歌合に・一四四・藤原良平）

花さそふ名残を雲にふきとめてしばしはにほへ春の山風
（同・落花といふ事を・一四五・藤原雅経）

芳野山花の古郷あとたえてむなしきえだに春風ぞふく
（同・残春のこころを・一四七・藤原良経）

故郷の花のさかりはすぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな
（同・題しらず・一四八・源経信）

花はちりその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる
（同・百首歌中に・一四九・式子内親王）

春ふかく尋ねいるさの山のはにほの見し雲の色ぞ残れる
（同・〈千五百番歌合に〉・一五六・藤原公経）

はつせ山うつろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれる
（同・百首歌たてまつりし時・一五七・藤原良経）

特に〈消失した桜の景〉詠がまとまって配列されている一四四から一四九までに注目してみる。

一四四、一四五は、落花の後の雲を形見や名残として桜を幻視する。その次の一四六は第一節で触れた通り〈消失した桜の景〉詠ではないが、桜を惜しむ気持ちで「杪」を見ており、桜を幻視する一四七に繋がる詠み方だった。一四七はかつて桜があった「むなしきえだ」に桜を幻視し喪失感を詠む。一四八は空へと視線を移し、幻視した桜の面影に春を忘れられない心を詠む。一四九も「むなしき空」に桜を幻視するが、一四八とは違い喪失感が強く漂う。

消え去った桜の姿を雲や枝に見当を付けて探し、幻視し、幻視することで消失を一層突きつけられ、桜は消失しても空には面影を感じられることを知り、しかし桜を幻視した空の「むなし」さによって喪失感は強まる。桜を惜しむ心が桜の姿を探す様子や、喪失感の高まっていく様子が、一四四から一四九まで通して構成されているのではないだろうか。

また、一五六、一五七が桜歌群の最後に配置されていることにも注目したい。桜歌群を締めくくるに相応しい、桜を惜しむ詠み方の一つとして、〈消失した桜の景〉詠を採っていると考えられるのではないだろうか。

建久期に萌した〈消失した桜の景〉詠は、桜を惜しむ詠み方の新たな型として形成され、後鳥羽院歌壇において深化していった。その型は『新古今集』に摂取され、『千載集』とは異なる独自の歌風を形成する一端となっているのだと言えよう。

おわりに

『千載集』との比較を通して『新古今集』春部の〈落花の後〉詠の特徴を分析してきた。『新古今集』春部は『千載集』と比べて落花の後を詠んだ歌が多いこと、さらに〈落花の後〉詠が著しく多く、詠み方も『千載集』と異なっていたことから、〈落花の後〉詠に『新古今集』の歌風の一端を見出せるのではないかと推測し、その中でも〈消失した桜の景〉詠に着目してここまで論じてきた。

『新古今集』に見られた雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠には、眼前から消失した桜の面影を雲に幻視するという特徴があった。このような特徴を持つ歌は『千載集』には見られない。先行する勅撰集にも見られなかった。

桜を雲に見立てる歌は『古今集』など早くから見られるが、雲を桜に見立てる歌は、俊成・西行らの桜が咲く前の期待を詠んだ歌まで見出せない。少し遅れて〈落花の後〉詠でも詠まれ始めた。しかし『千載集』には採られなかった。雲を桜に見立てた〈落花の後〉詠は建久期にも詠み継がれるが、これらの例では雲は桜の代わりになるものとして詠まれており、桜の喪失感は希薄だった。こうした詠み方は後鳥羽院歌壇において、喪失感から雲に桜を幻視する〈消失した桜の景〉詠へと深化する。『新古今集』入集の雲を桜に見立てた〈消失した桜の景〉詠は、全て後鳥羽院歌壇において詠まれたものだった。このように新古今時代において桜を惜しむ詠み方の新たな典型が形成されていることを確認できた。

また、見立てを使わない〈消失した桜の景〉詠については、早くは春を忘れることができないという意で桜の消失とその幻視を詠んだ経信歌があったが、必ずしも〈消失した桜の景〉詠として理解されていたわけではなく、新古今時代において再発見された可能性があること、建久期においては春や桜を惜しむ詠み方の一つとして詠まれていること、そして後鳥羽院歌壇において空に幻視する詠み方も見られるようになることが明確になった。

経信の後しばらくは〈消失した桜の景〉詠を見出せないが、俊成・西行の頃からそれに繋がる詠み方が見え始め、建久期にこの詠み方が萌芽し、後鳥羽院歌壇において深化していくことが明らかになったのではないだろうか。

こうした流れにおいて『新古今集』春部には八首もの〈消失した

桜の景〉詠が採られる。その配列では、桜を惜しむ心が桜の姿を探す様子や、喪失感の高まっていく様子が構成されていた。また桜歌群を〈消失した桜の景〉詠で締めくくっていることからも、桜を惜しむ詠み方の一つの型として扱われ、桜歌群の最後に相応しい歌として入集していると言えよう。

『新古今集』には、散ってしまった桜の面影を現在の景に重ねる、二重写しの構造を持つ詠み方が新しく見られた。このような〈消失した桜の景〉詠は、従来指摘されてきた『新古今集』の歌風[22]とどう関わってくるのだろうか。この点は丁寧に検討する必要があるが、ひとまず見通しだけ述べておきたい。

第一に、夢幻的という特徴と関わるだろう。かつて咲いていた桜の面影を幻視するという性質上、夢幻的であるという点が看取されよう。

第二に、象徴的という特徴と関わると考える。直接的な表現ではなく、第一にあげた夢幻的表現――ここでは〈消失した桜の景〉の幻影を見るという表現――によって喚起される感傷的な気分、桜を惜しむ気持ちや喪失感を表現している点が共通する。

第三に、イメージの重層化[23]という特徴とも結び付くのではないか。〈消失した桜の景〉詠は、落花の前後の景を二重写しにする詠み方だった。重層的構造を持つという点で『新古今集』の歌風と関係すると言えよう。[24]

他に、『新古今集』に〈落花の後〉詠や〈消失した桜の景〉詠という、無常心の感じられる詠み方が多く見えることについては、中世的な思想や価値観とも関わってくる可能性はあるだろう。

〈消失した桜の景〉詠は、『千載集』とは異なる『新古今集』独自の歌風を形成する一端になっているのではないか、という見通しを述べてみた。

本稿で明らかにした詠み方が、従来指摘されてきた『新古今集』の歌風とどう関わっていくのかについての具体的な検討と、これらの詠み方が後代の和歌にも影響を及ぼしていくのかについては、今後の課題としたい。

注

(1) 例えば『谷山茂著作集三　千載和歌集とその周辺』(角川書店、一九八二)第二章第八節。

(2) 『谷山茂著作集三　千載和歌集とその周辺』(同前)同前、鈴木健一／鈴木宏子編『和歌史を学ぶ人のために』(世界思想社、二〇一一)第一部五(吉野朋美執筆)、他。

(3) 『谷山茂著作集三　千載和歌集とその周辺』(同前)同前、渡部泰明『中世文学研究叢書8　中世和歌の生成』(若草書房、一九九九)序章、他。

(4) 『谷山茂著作集三　千載和歌集とその周辺』(同前)同前、他。

(5) 『千載集』において桜歌と認定したものは、四〇-一〇五、一二二、一二八、一三一、一三二、一三五。内、落花の歌は七七-一〇三、一〇五、一二二、一三一、一三二、一三五。『新古今集』における桜歌は五六、六二、七九、八〇、八二-一五八、

一六七、一七〇、一七四。内、落花の歌は一〇六-一一〇、一一四-一五〇、一五二-一五八、一六七、一七〇、一七四。

(6) 以下、和歌本文及び歌番号は原則として新編国歌大観に拠る。

(7) 田中裕・赤瀬信吾『新日本古典文学大系11　新古今和歌集』(岩波書店、一九九二)、峯村文人『新編日本古典文学全集43　新古今和歌集』(小学館、一九九五)、久保田淳『新古今和歌集　上』(角川ソフィア文庫、二〇〇七)。

(8) 田中裕・赤瀬信吾『新日本古典文学大系11　新古今和歌集』(同前)、久保田淳『新古今和歌集　上』(同前)。

(9) 引用は岡村繁『新釈漢文大系　第100巻　白氏文集　四』(明治書院、一九九〇)による。通釈も同書による。

(10) 『大納言経信集』(新編国歌大観『経信集』・新編私家集大成「経信Ⅲ」)。

(11) 『大納言経信集』(新編国歌大観『経信集』・新編私家集大成「経信Ⅲ」)。『経信卿家集』(新編私家集大成「経信Ⅱ」)は「未忘春意云事を」とする。また、流布本系統(新編私家集大成「経信Ⅰ」)では二か所に重出しており、二〇では「花」、一二五では「未忘昔意」とする。流布本系統の成立は後代に下り、二十一代集成立以後と考えられているため(関根慶子『古典文庫第四十四冊　経信集』〈古典文庫、一九五一〉解説、久松潜一・松田武夫・関根慶子・青木生子『日本古典文学大系80　平安鎌倉私家集』〈岩波書店、一九六四〉解説『大納言経信集』〈関根慶子執筆〉)、本来の歌題は「未忘春意」であると考えられる。

(12) 久保田淳『新古今和歌集　上』(同前)。

(13) 田中裕・赤瀬信吾『新日本古典文学大系11　新古今和歌集』(同前)、峯村文人『新編日本古典文学全集43　新古今和歌集』(同前)。

(14) 谷知子「「消失」の景――イメージの重層法の形成――」(『中世和歌とその時代』〈笠間書院、二〇〇四〉第三章第四節〈初出一九八六〉)。

(15) 例えば、谷知子『中世和歌とその時代』(同前)序章に、「良経が建久期に自邸を中心に展開した歌会、歌合は建久期歌壇、良経家歌壇と呼ばれ、『新古今集』を生み出す重要な原動力となった」とある。

(16) 鈴木徳男『新注和歌文学叢書7　続詞花和歌集新注　上』(青簡舎、二〇一〇)は、同じ詞書がかかる四八の補説で、「千載集によると、忠通の近衛第での歌会における詠。康治二年(一一四三)三月ころか。49、50歌も同じ折の作」とする。また、同じ機会に同題で詠まれたと考えられる、

たづねつる花のあたりになりにけりにほふにしるし春の山かぜ

(千載集・春歌上・近衛殿にわたらせたまひてかへらせ給ひける日、遠尋山花といへる心をよませ給うける・崇徳院・四六/続詞花集・春下・四八)

について、片野達郎・松野陽一『新日本古典文学大系10　千載和歌集』(岩波書店、一九九三)は、「康治二年(一一四三)三月頃、近衛殿御幸和歌会。忠通の新築の近衛第での歌会」とする。

(17) 西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『和歌文学大系21　山家集・聞書集・残集』(明治書院、二〇〇三)『山家集』解説(西澤美仁執筆)。

(18) 引用は橋本不美男・有吉保・藤平春男『新編日本古典文学全

集87　歌論集』（小学館、二〇〇二）による。

（19）渡部泰明『中世和歌史論―様式と方法』（岩波書店、二〇一七）第一編第三章（初出二〇〇四）。

（20）『後鳥羽院御口伝』では、「大納言経信、ことにたけもあり、うるはしくて、しかも心たくみに見ゆ」と評される。引用は渡部泰明・小林一彦・山本一『歌論歌学集成　第七巻』（三弥井書店、二〇〇六）による。

（21）久保田淳『藤原定家全歌集　上』（ちくま学芸文庫、二〇一七）。

（22）久松潜一編『改訂新版日本文学史　中世』（至文堂、一九六四）前期第一章二（安田章生執筆）、他。

（23）有吉保『新古今和歌集の研究　続篇』（笠間書院、一九九六）第二章第一節（初出一九八二）。

（24）谷知子「「消失」の景――イメージの重層法の形成――」（同前）では、新古今歌人たちがイメージの重層化に強い関心を寄せていたことが指摘されている。

（さのももこ　本学大学院博士課程前期課程在学生）